The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	新発現のウイグル訳『仏説善悪因果経』
Author(s)	橘堂，晃一
Citation	内陸アジア言語の研究. 2017, 32, p. 33-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/67839
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

内陸アジア言語の研究 32, 2017.10, 33–48

新発現のウイグル訳『仏説善悪因果経』

橘 堂 晃 一*

はじめに

本稿は，ロシア科学アカデミー東方文献研究所（The Institute of Oriental Manuscripts, Russian Academy of Science）所蔵のウイグル語訳『仏説善悪因果経』（以下『善悪因果経』）写本の訳注研究である(1).

中国で撰述された，偽経（疑経）に分類される『善悪因果経』（T. 85, No. 2881）は，過去，現在，未来の三世に渉る因果応報を極めて明解に鼓吹する経典である(2). 善因善果，悪因悪果という儒教倫理にも通底する教えは，中国は言うまでもなく周辺地域にも広く受容されるに至り，現在までにソグド語，チベット語，モンゴル語，カルムイク語，満洲語訳の存在が知られている(3). しかも，それぞれが複数のテキストを伝承している．また，日本にも 8 世紀までに将来され，その注釈書も数多く制作されている(4).

このように『善悪因果経』は，一つの経典が複数の言語に伝訳されていく過程を追跡することのできる格好の事例となる．この点に着目した森安孝夫氏は，「『善悪因果経』の流通とその史的背景」（森安 1986）において，新将来の吉川小一郎旧蔵の 17 世紀頃のモンゴル語訳『善悪因果経』

---

* KITSUDO Koichi. 龍谷大学仏教文化研究所客員研究員（Research Fellow, Research Institute for Buddhist Culture, Ryukoku University）

(1) Irina Popova・ロシア科学アカデミー東方文献研究所所長には，写本閲覧に際して便宜をはかって頂いた．また，森安孝夫・大阪大学名誉教授にはモンゴル文『善悪因果経』（阪大本）についてご教示いただき，本稿の投稿を督励してくださった．松川節・大谷大学教授，Peter Zieme・ベルリン自由大学名誉教授にも助言を賜った．以上の方々に甚深の謝意をここに表します．

(2) 牧田諦亮氏は，『大周刊定目録』（695 年成書）の「偽経目録」に初めて著録されていること，ならびに敦煌写本「優婆塞戒経」（P. 2276）の奥書に仁寿四年（西暦 604 年）四月八日に三年齋として『善悪因果経』を読誦したと記されている事実に基づいて，本経の成立を 6 世紀頃とみた（牧田 1972 [2014]: [381]）．さらに張小艶氏は，本経の内容と『提謂波利経』，『阿育王息壊目因縁経』，『大般涅槃経』，『十地経論』とを比較し，これらとの間に密接な関係があることを指摘し，さらに「師公」，「阿魔」といった特徴的な用語の用例を検討し，本経の成立を 6 世紀中葉と考えた（張 2016）．曹凌氏は世界に散在する敦煌写本を渉猟し，現在までに 53 件の『善悪因果経』写本を確認している（曹 2010）．

(3) 森安 1986: 225–227．ソグド語テキストについては Gauthiot and Pelliot 1920–1928 と MacKenzie 1970 を参照せよ．敦煌出土のチベット文写本については，最近，任小波氏が校訂テキストを公刊した（任 2016）．薩仁高娃氏と陳玉氏は，チベット文敦煌写本と漢文テキストを比較し，釈迦光（Śākya ’od）訳チベット文テキストはサンスクリットから翻訳されたと考えたが（薩仁高娃，陳 2009: 104–108），任小波氏は漢文からの翻訳であると指摘している（任 2012）．

(4) 牧田 1972 [2014]: [386–387].

写本（現在，大阪大学文学研究科所蔵．以下，阪大本と略）を検討し，そこで用いられるサンスクリット起源の仏教用語が 13–14 世紀のウイグル語形式と対応することから，この阪大本が未発現のウイグル語訳『善悪因果経』に由来する可能性があると推測した．

その後，Peter Zieme 氏は「ウイグル語『善悪因果経』の痕跡を求めて（“Auf den Spuren der altuigurischen Version des ‘Sūtra der Ursachen und Wirkungen’ (*Shan'e yinguo jing*)”）」と題する論考（Zieme 2009）において，ウイグル文『慈悲道場懺法』の文中に『善悪因果経』（šen aγ [i]n qua ki）の経文として引用される文章を紹介していることから，ウイグル人が『善悪因果経』の存在を知っていたと指摘する(5)．

森安・Zieme 両氏の研究は，ウイグル人のあいだに『善悪因果経』が流通していたことを，かなりの確度で予想させるものであったが，なおウイグル語訳本そのものは確認されていなかった．しかしこの度，筆者はロシア科学アカデミー東方文献研究所のウイグル文写本コレクションの中にまさしく『善悪因果経』を見出すことができた．

本稿では，まずウイグル文のテキストと訳注を提示する．そしてモンゴル文（阪大本）とウイグル文とを比較し，モンゴル文（阪大本）がウイグル文を底本として成立したという森安氏の仮説を検証する．

1．ウイグル文『善悪因果経』のテキストと翻訳

本稿で検討するウイグル文『善悪因果経』は，ロシア科学アカデミー東方文献研究所所蔵 SI 1749 である．かつては SI Kr II 14/1 という番号で保管されていたことから，ウルムチのロシア総領事の N. N. Krotkov（1869–1919）の蒐集品である．明確な出土地は不明であるが，その他の Krotkov 蒐集のウイグル語写本と同じくトルファン地域出土とみて大過ないだろう．

稿末の写真複製に示す通り，この写本は，貝葉形の 1 葉分をほぼ完存している．法量は，縦 20 × 横 44.7 ㎝で，片面ごとに 25 行が書写される．上下の界線は引かれていない．

以下，左側にウイグル文のテキストと和訳，右側に大正蔵所収漢文テキストの対応部分（T. 85, No. 2881, 1380b17–24）を配置した．残存するウイグル文に対応する漢文テキストについては，該当部分を保存する複数の敦煌写本との校合を行ったが(6)，経題を除いて異同は見当たらない．

(5) Zieme 2009: 389–392. しかしその引用文は『善悪因果経』ではなく，実際には『仏説輪転五道罪福報応経』からの引用であることが Zieme 氏によって指摘されている．

(6) P.2055, P.2922, S.4911, S.4978, S.5458, S.5602, S.6311, S.6960.

凡例

///	破損個所
(abc)	表記されない音素
[abc]	破損部分を推補した文字
abc	一部欠けている文字
abc	朱書きの文字
,,	句読点
◎	糸通しの穴

【テキスト・和訳】

Recto[7]

01) 01 namo but namo d(a)rm namo saŋ
南無 仏 南無 法 南無 僧

02) 02 t(ä)ŋri t(ä)ŋrisi burxan y(a)rlïqamïš ädgü-li 佛説善
天の中の天たる仏が説いた「善と

03) 03 ayïγ-lï iki türlüg qïlïnč tüš-in 悪因果
悪の二種の行為の果報を

04) 04 nomlamaq sudur nom bitig bir tägzinč 經
説く経典」一巻.

05) 05 ančulayu ärür ,, ◎ mäniŋ äšidtüküm 如是我聞.
次のように私が聞いたことが

06) 06 bar ärti ,, ◎ bir üdün 一時,
あるのであった．ある時,

07) 07 bo *üč* qat ◎ yertinčü yer
この三層の世界の大地の

08) 08 suv-nung umuγï ïnaγï atï kötrülmiš 佛在
帰依処たる世尊,

(7) 写本右欄外の別筆で bo ärdini nom「この宝の教え」と書写される.

09) 09 ayaγ-qa tägimlig tükäl bilgä t(ä)ŋri
応供，一切智，天の中の

10) 10 t(ä)ŋrisi burxan az-sïz qïz-sïz sïqïγsïz
天たる仏陀は，貪りなく，不足なく，抑圧なく

11) 11 qavrïqsïz yaγïsïz bör*i*-siz ig-siz kigän
苦しみなく，敵なく，狼なく，疾病

12) 12 -siz bay barïmlïγ qutruldačï tïnlγ-larïn
なく，豊かにして，救われるところの衆生を

13) 13 tïqmïš täg tolu tükäl qutluγ-ta qutluγ
詰め込んだ如く満ち溢れた，福徳中の福徳ある

14) 14 šravast balïq-qa yaqïn čit tegin 舍衛國
舍衛城に近い，祇陀太子の

15) 15 -niŋ yemiš-likintä bir kün bešär yüz
果樹園において，ある時，五百人の

16) 16 umuγ-suz ïnaγ-sïz irinč yarlïγ tïnlγ-larïγ
寄る辺なき哀れで貧しい衆生に

17) 17 aš yumγaq bušï bergüči ,, anatapintaki 祇樹給孤獨園.
団食を布施する給孤独

18) 18 atlγ bayaγut amanč yaratmïš čitavan
という名の長者が作った祇多園

19) 19 atlγ ïduq qutluγ s(a)ŋram-ta y(a)rlïqayur
という名の福徳ある僧伽藍におられた.

20) 20 [är]ti ,, taqï ymä ülgüsüz üküš bodistv 爾時，世尊與無量菩薩
さらにまた無量の多くの菩薩

21) 21 [-lar ,, a]l[q]u aqïγ-lar-ïγ alqmïš
たち，一切の有漏を尽くした

22) 22 arxant-lar ,, ,, ,,
阿羅漢たち,

23) 23 t(ä)ŋri-li yal(a)ŋuq-lï sansïz üküš 人天大衆圍繞
天，人ら無数の

24) 24 uluγ tirin quvraγ-lar-ïγ tägrig
大衆を集め

25) 25 -läp k(ä)ntü tükäl bilgä biliglig
て，自らが一切智者,

Verso

26) 00 baš[tïnqï ?]

27) 01 t(ä)ŋri t(ä)ŋrisi burxan ol qamaγ quvraγ
天の中の天たる仏は，その全ての会衆

28) 02 arasïnta arslan-lïγ örgün üzä
中において金剛師子の坐に

29) 03 oluru y(a)rlïqap ,, br(a)xmasvar ïduq qulqaq
座したまいて，梵音という聖なる耳

30) 04 -lar-nïŋ rasayanï bolmïš üčün ,, ,,
の霊薬と為らんがために

31) 05 nom nomlayur ◎ ärti ,, ,, 説法，一心靜聽.
法を説かれたのであった.

32) 06 anta ötrü ◎ öz iltindäči 爾時,
そこで即ち，具寿

33) 07 ayaγ-qa tägim ◎ -lig tözün
応供，尊者である

34) 08 anant *toyïn* imrärigmä qamaγ t(ï)nlγ-lar 阿難為衆生
道人阿難は取り囲む一切衆生の

35) 09 üčün ,, olurmïš ornïntïn yoqaru turup 故,
ために，座っていた坐より起ちて

36) 10 tiz-ig čökitip e*l*igin[8] qavšurup
膝を着いて合掌し

37) 11 tükäl bilgä t(ä)ŋri t(ä)ŋrisi burxan
一切智者，天の中の天たる仏に

38) 12 -qa ïnča tep ötüg ötünti ,, ,, 而白佛言.
次のように尋ねた.

39) 13 ančulayu kälmiš atï kötrülmiš umuγ ïnaγ 世尊,
「如来，世尊，帰依処たる

40) 14 t(ä)ŋrim ,, ,,
我が天よ，

41) 15 m(ä)n amtï körü täginür-m(ä)n bo yertinčü 今見世間等
私が今，拝見するには，この世間の

42) 16 -täki kiši yalaŋuq-larïγ bir töz-lüg
人々は一つの種

43) 17 uruγ-luγ[9] oqšatï kiši-lär ol ,, yana ol 同一種生
族の同類の人々である．またその

44) 18 yalaŋuq-lar arasïnta antaγ körklüg 在人中,
人々の間では，或いは姿

45) 19 mäŋiz-lig-lär bar antaγ körksüz ,, ,, 有好有醜.
麗しい者もあれば，醜い者も

46) 20 bar antaγ ymä yavïz ärklig *bar* ,, 有強有弱.
ある．或いはまた弱い者も強い者もある．

---

(8) e*l*igin の -l- 字のフックは失記されている．
(9) uruγ「種，種族」は ’wlwq と誤写されている．

47) 21	antaγ yoq čïγay bay barïmlïγ ,, antaγ *ba*[r] 或いは貧しい者，富める者，或いは	有貧有富.
48) 22	ämgäk-lig mäŋi-lig ,, bar antaγ ayaγ 苦ある者，楽ある者がある．或いは貴	有苦有樂.
49) 23	-lïγ čiltäg-lig yeg üstünki ,, ,, 顕の最上なる者もいる．	有貴
50) 24	taqï ymä bar qod[ïq]ï yavïz ün ägzig さらにまた下賤もいる．音声	有賤．音聲
51) 25	-lär ,, ymä bir täk ärmäz ,, sav-larï söz もまた同じではなく，言葉	不同，言語［殊方］.

【語註】

02–04) ädgüli ayïγlï iki türlüg qïlïnč tüš-in nomlamaq sudur nom bitig bir tägzinč：ウイグル文の経題を示す．直訳すれば「善と悪との二種の行為の果報を説く経典，一巻」となる．「因果」は通常ウイグル語では「tïltaγ tüš」と定訳される．なお P.2922 の経題は「佛説善悪因果経一巻」となっており，ウイグル文が「一巻」と明記する点で一致する．

05–06) mäniŋ äšidtüküm bar ärti：Chin. 如是我聞．ウイグル文では ančulayu ärür mäniŋ äšidmišim「そのようである←私の聞いたことは」と逐語的に翻訳するのが一般的である．

07–10) bo üč qat yertinčü yer suv-nung：üč qat yertinč，直訳すれば「三層の世界」．仏教の世界観に照らせば，迷いの世界たる欲界，色界，無色界の「三界」を意味すると考えられる．ただしウイグル語には「三界」に対して üč uγuš という定訳がある．

10–14) az-sïz qïz-sïz sïqïγsïz qavrïqsïz yaγï-sïz böri-siz ig-siz kigän-siz bay barïmlïγ qutruldačï tïnlγ-larïn sïγmïš täg tolu tükäl qutluγ-ta qutluγ šravast balïq：「天たる仏陀は，貪りなく，不足なく，抑圧なく，苦しみなく，敵なく，狼なく，疾病なく，豊にして，救われるところの衆生を包み込んだ如く満ち溢れた，福徳中の福徳ある舎衛城」．az-sïz は，「貪りなく」の他に，「少なくない」との意味もある．後者の意味であるとすれば qïz-sïz とともに二詞一語を形成し「欠少なく」と理解される．

漢文原典には「舎衛城」とだけあるが，ウイグル文の šravast balïq「舎衛城」は様々な言葉で修飾される．それはおそらく以下のような舎衛城（śrāvastī）の語源的解釈を念頭に翻訳者が挿入したものであろう．「室羅筏【下音伐．梵語西域國名也．具足應云室羅筏悉底，此翻為豊德．或曰聞物．即舊云舍衛國也】」（『続一切経音義』巻二，T. 54, No. 2129, 938c24）．或いは，「正梵音云室羅筏悉底．此云豊德．一具財寶，二妙欲境，三饒多聞，四豊解脱，故以名焉．今言舍衛」（『金剛般若経疏』，T. 85, No. 2741, 151a21–23）とあるのが参考になる．

これらの伝統的解釈によると，舎衛〜室羅筏悉底（Uig. šravast < Toch. A/B śrāvasti (?) < Skt. śrāvastī）とは「豊徳」を意味し，「財宝」，「妙境」，「饒多聞」，「豊解脱」の義を内包するという．ウイグル文の表現はこれらと完全に合致するものではないが，翻訳者がこのような解釈に通じていたことを示している．

14–15) čit tegin-niŋ yemiš-likintä：「祇陀太子の園林」．すなわち「祇陀林」，「祇樹」を指す．Uig. čit (< Toch.) < Skt. jeta.

15–18) beš yüz umuγ-sïz ïnaγ-sïz irinč yarlïγ tïnlγ-larïγ aš yumγaq bušï bergüči anatapindaki atlγ bayaγut amanč：「五百人の寄る辺なき哀れで貧しい衆生に食團を布施する給孤独という名の長者」．給孤独長者が五百人の優婆塞と共にいたとする経典は中阿含をはじめとして複数確認されるが，彼らに食を布施したと記す経典は見あたらない．

17) aš yumγaq： yumγaq「球形の」（ED: 936）．ここでは「団食」と理解した．給孤独（Skt. anātha-piṇḍada, anāthapiṇḍika）の piṇḍada とは，球形の塊を指す．『翻訳名義集』にも「阿那他（anātha）云無依．亦名孤獨．<u>擯荼陀（piṇḍada）此云團施</u>．好施孤獨，因以為名」（T. 54, No. 2131, 1083c10–11）とある．ウイグル文は，須達長者（＝給孤独長者）が球形の食事を貧者に施したことに因んだ挿入句と考えられる．「舎衛城」と同じく語源的解釈に基づく挿入句と言える．

17) anatapintaki：< Toch. A/B anāthapiṇḍake < Skt. anāthapiṇḍika「給孤独長者」．

18) čitavan：< Toch. A/B jetavaṃ < Skt. jetavana「祇陀林」．

18) amanč：< Toch. A/B āmāś/ amāc < Skt. amātya「大臣；長者」．

21–22) aqïγ-larïγ alqmïš arxant-lar：「一切の有漏を尽くした阿羅漢たち」．漢文原典には該当する表現はない．

28) arslan-lïγ örgün：Skt. siṃhāsana．該当する表現は漢文原典にはない．

29) br(a)xmasvar：< Toch. A/B brahmaswar < Skt. brahmasvara「梵音」．漢文原典に該当する語句は存在しない．仏陀の説法を指す．

30) rasayanï：(< Toch.) < Skt. rasāyana「霊薬，妙薬」．漢文原典に該当する語句は存在しない．ウイグル語仏典では nom「法」の比喩表現として使用されることが多い．E.g., nomluγ rasayan (BT XIII: 117).

31) nom nomlayur ärti：「説法」に対応する．しかし後続「一心靜聽」に対応する文章はない．

32–34) öz iltindäči ayaγ-qa tägim-lig tözün anant：「具寿，応供，尊者である阿難」．漢文原典の「阿難」が，さらに öz iltindäči「具寿（Skt. āyuṣmat）」，ayaγqa tägimlig「応供（Skt. arhar）」，tözün「尊者」により修飾されている．

34) toyïn：この読みは P. Zieme 氏にご教示いただいた．anant の語末の -t は長く尾を引いている．toyïn の t- 字は前行 tägimlig の t- と比較されたい．

39–40) ančulayu kälmiš atï kötrülmiš umuγ ïnaγ t(ä)ŋrim：「如来，世尊，帰依処たる我が天よ」．漢文原典の「世尊」に対応するウイグル語定訳は atï kötrülmiš であるが，ここではさらに ančulayu kälmiš「如来」，umuγ ïnaγ「帰依処」が加えられている．

46) yavïz ärklig：yavïz「悪い」は第 50 行では「賤」に対応するが，ここでは「弱」に対応していると思われる．ärklig「強」は ’RYK(L)YK と綴られているが，語中の -Y- は誤記とみなす．

50) qod[ïq]ï yavïz：「下賤なるもの」．漢文原典「有賤」に対応．

51) bir täk：「同じ」．T’K の転写には täk「単に；ただ」と täg「〜の如く」の二つの可能性がある．庄垣内 2003: 663 は täk，BT XXV: 350 は täg を取る．今は庄垣内の読みに従う．

2. モンゴル文『仏説善悪因果経』（阪大本）との関係について

冒頭で紹介した森安孝夫氏の論考（森安 1986）は，漢文，ソグド文，チベット文，モンゴル文の校定を通じて，『善悪因果経』諸本の系統を明らかにしようとするものであった．ソグド文，チベット文の校定は専家に委ね，自身はとくに漢文（敦煌写本）とモンゴル文について校定している．諸本の系統解明は，なお途上にあるが，本稿で紹介したウイグル文テキストもこれに寄与することができると考え，森安氏が将来の課題として託されていたウイグル文とモンゴル文（阪大本）との関係について考察したい．

森安氏によれば，モンゴル文『善悪因果経』には 3 種類の系統が確認される．モンゴル大蔵経に入蔵される 2 種類のテキスト（Ligeti Catalogue Nos. 1118, 1119），そして阪大本である(10)．前 2 本は，チベット大蔵経の 2 系統のテキストからの翻訳と推測されている．一方，阪大本は，そのいずれにも一致しない別系統のテキストである．森安 1986 は，モンゴル大蔵経所収の 2 写本の仏教用語はおおむねサンスクリット音写形式あるいはチベット語の直訳形式であるのに対し，阪大本ではウイグル語形式に由来する仏教用語が用いられることを指摘した．その際に森安が例示したのは，阪大本の冒頭部分にみられる「菩薩」「給孤独長者」「祇陀太子」「給樹給孤独園」であった．本稿で提示したウイグル訳『善悪因果経』写本 SI 1749 は，ちょうどこの冒頭部分に相当するので，森安の掲げた用例を実際に検証することが可能となった．次の**表 1** は，それらを比較したものである．参考のために森安氏が別のウイグル語仏典から推測したウイグル語を森安推定案として併記しておく(11)．

この表に挙げたウイグル文『善悪因果経』の仏教用語は，概ね森安氏が期待したとおりの語形であったといえる．このことは，阪大本がウイグル文から翻訳されたとする森安氏の推測を補強するように思われる．

ただし，本稿で扱った SI 1749 写本のウイグル文テキストと，阪大本モンゴル文テキストには少なからず異同が見出され，このウイグル文が阪大本の直接の原典とは考えづらい．

---

(10) モンゴル文『善悪因果経』写本は，第三次大谷探検隊隊員吉川小一郎氏旧蔵品とされる．全 10 葉のうち大阪大学が 8 葉分を購入し，鶴見大学図書館と個人が一葉ずつ所有している（『第 131 回貴重書展　鶴見大学図書館所蔵貴重書展』鶴見大学図書館，2012 年）．鶴見大学図書館貴重書展の解説では，「ソグド語」とされ，かつ「吉川幸次郎旧蔵本」と説明されるのは誤り．

(11) 阪大本のモンゴル語テキストについては，森安孝夫氏が作成されたノートを，氏のご厚意により参照することを許された．この場を借りて感謝の意を表したい．ただしモンゴル文解釈の責任はすべて筆者にある．

表 1 『善悪因果経』仏教用語対照表

漢文	Skt.	阪大本	ウイグル（SI 1749）	森安 1986 推定案
菩薩	bodhisattva	bodistv	bodistv	bodistv
給孤独長者	anāthapiṇḍika	anaadabindeki bayan	anatapintaki atlγ bayaγut amanč	anaadapindaki
祇陀太子	jeta	čid taki[12] kübegün	čit tegin	čit tigin
舎衛城[13]	śrāvastī	š[ir]avast balγasun	šravast balïq	š(ir)avast balïq
祇樹	jetavana	čit taki kübegün-ü ǰimišlig	čit tegin-niŋ yemiš-lik	čit tigin-niŋ yimišliki čitavan saŋram

まずは経題『仏説善悪因果経』の訳を比較してみよう．

阪大本：qutuγ-tu sayin ba maγui kiged : gem yerü(n)deg-ün siltaγan ba ači ür-e-yi üǰügülküi neretü sudur「聖なる善と悪，罪過を対治するもののの因と果を説示するものという名の経」

ウイグル：t(ä)ŋri t(ä)ŋrisi burxan y(a)rlïqamïš ädgüli ayïγlï iki türlüg qïlïnč tüš-in nomlamaq sudur nom bitig bir tägzinč「天の中の天たる仏が説いた善と悪の二種の行為の果報を説く経典一巻」

阪大本の冒頭 qutuγ-tu「聖なる」は，経典のタイトルに付されるサンスクリット語 ārya，チベット語の ’phags pa の訳語である．対するウイグル文には見られない．また，阪大本の「善悪，過ちを消すものの因と果」に対し，ウイグル文は「善と悪の二種の行為の果報」となっており，「因」に相当する語彙が脱落している[14]．これが遺漏によるものかどうかは不明である．

次にウイグル文にみられる語源解釈的補足説明（語註 10–14, 17 参照）が，モンゴル文には一切見られない．「舎衛國」を例にとって見てみよう．阪大本は，š[ir]avast balγasun「舎衛城」（第 1 葉第 9–10 行）とあるのみだが，ウイグル文では，「貪りなく，不足なく，抑圧なく苦しみなく，敵なく，官吏なく，疾病なく，豊にして，救われるところの衆生を包み込んだ如く満ち溢れた，福徳中の福徳ある舎衛城」となる．さらに，「説法一心静聴」についても，阪大本の nigen üǰügür-tü sedkil-iyer nom-i sonusγči nom-un udq-a üǰügül-ün ǰokiyanbai「一心に法を聴く者すべてに法の内容を説き示していた」（第 1 葉第 16–18 行）がおおむね漢文原典と対応するのに対し，ウイグル文は「天の中の天たる仏は，その全ての会衆中において金剛師子の坐に座したまいて，梵音という聖なる

(12) この阪大本の čid-ḏeki kübegün = ČYT D’KY KWB’KWN は，モンゴル語としては「祇陀にいる太子」と解釈されるが（森安 1986: 229），後置詞 -taki (~ -daki) = -D’KY「〜にいる」の挿入はやや不可解である．一方，これに対応するウイグル語は čit tegin = ČYT TYKYN「祇陀太子」であったことが，本稿で検討した SI 1749 写本により確証される．ここでは，ウイグル語の tegin = TYKYN (~ T’KYN)「太子，王子」が，モンゴル語では綴りの似る -taki ~ daki = D’KY ~ T’KY と誤解されたという可能性を考慮しておきたい．もしこれが正しければ，阪大本『善悪因果経』がウイグル訳本を参照した傍証となる．

(13) この語について，森安氏は「祇樹給孤独園」の訳語の中に含めて紹介するが（森安 1982: 229），比較すべき固有名詞として重要と考え，ここでは「舎衛城」として別出する．

(14) 「因」の訳語としては tïltaγ が期待される．

耳の霊薬と為らんがため法を説かれたのであった」（v01–05＝27–35）と重畳である．これだけ差異があるテキスト間に直接の伝訳関係を認めることは困難であろう．

では，阪大本に見られるウイグル的要素はどのように理解すべきであろうか．ここでは以下に挙げる 2 つの可能性を想定しておきたい．

第一に，今回紹介した SI 1749 写本とは別のウイグル語訳本が存在していて，阪大本はそれを参照したという可能性である．このようなウイグル語訳本が新たに発見されることを待たねばならない．

第二に，ウイグル文の他に，漢語やチベット語など他の言語による『善悪因果経』テキストを校合して翻訳した可能性が考えられる．このことを示唆するのは，Damdinsüren 氏によって紹介されたモンゴル文『金光明最勝王経』の奥書である．これはウランバートルの Janraiseg 寺より発見された写本で，経文は Kanjur の 29 章本に相当するという[15]．その内容は次のようである．

> 「サキャ派の僧 Šes-rab seṅ-ge が，チベット文字（テクスト）とウイグル文字（テクスト）からモンゴル語訳した．（チベット語の？）仏や菩薩の名称はモンゴル語の発音に馴染まないので，ウイグルの仕方に従ってインド語化した．さらに Puṇyaśrī situ［筆者注：プンニャシュリー司徒］[16]と一緒にインド語音，チベット語音，ウイグル語音の各テクストを引き合わせてその音形と意味とを誤らず決定した」[17]．

この奥書からウイグル語テキストの他にチベット語，サンスクリット語が校合に用いられたこと，そして固有名詞はウイグル式のサンスクリット語形が用いられたことを示している．実際，Šes-rab seṅ-ge が翻訳したモンゴル訳『方広大荘厳経（*Lalitavistara*）』 には，ウイグル方式のサンスクリット語形が数多く含まれている．それらの語彙は N. Poppe 氏，L. Ligeti 氏，庄垣内正弘氏，G. Kara 氏，山口周子氏らによって研究されたが，特に庄垣内氏はそこに見られる法則性を明らかにした[18]．このことから庄垣内氏は，Šes-rab seṅ-ge の素性について，サンスクリット由来のウイグル語仏教用語に通暁したチベット人であったと推測している[19]．

もしモンゴル文『金光明最勝王経』と同じ訳経過程を『善悪因果経』にも想定することができるとすれば，本稿で紹介したウイグル文テキストも底本の 1 つとして利用された可能性はある．この場合，サンスクリット語起源の仏教用語のみが参照され，増広された部分は採用されなかっ

---

(15) Damdinsüren 1979: 44.

(16) 未同定のタントラ文献をチベット語からウイグル語に翻訳した puny-a-širi と同一人物である可能性がある．BT VII: 46. Cf. 庄垣内 1990: 159．situ は「司徒」のウイグル語音写とみなしておく．

(17) 庄垣内 1990: 159．この他，『五護呪（*Pañcarakṣā*）』にも同じ奥書が認められる（庄垣内 1990: 159）．IOM 所蔵のウイグル文『五護呪』版本断片 2 点が，Radloff 1928: Nr. 60, Nr. 103 に収載される（Elverskog 1997: 55–56）．この他，ベルリン科学アカデミー・トルファン研究所所蔵資料中にも『五護呪』の版本と写本の断片が確認される（Zieme 2005）．

(18) Ligeti 1974, 庄垣内 1990, Shōgaito1991, Shōgaito 2003, Kara 2001, 山口 2013.

(19) Shōgaito 2003: 121–122. 山口 2013: 74–79 も同じ見解である．

たものと考えられる．実際にウイグル文が校合に利用されたとすると，ウイグル語からモンゴル語へと翻訳されたことが明らかな『仏説北斗七星延命経』に次ぐ貴重な事例となる[20]．

いずれにせよ，現段階で結論を提示することはできない．モンゴル文『善悪因果経』の原典および訳経過程の解明は，漢文，チベット文，モンゴル文をはじめとする全てのテキストの校訂を俟って検討しなおす必要があるだろう．

結びにかえて

SI 1749 写本は僅かに一葉分を保存するにすぎないが，ウイグル仏典に内在する特質とモンゴル仏典への伝訳という，2 つの重要課題を照射する資料であることが明らかとなった．

内在する特質とは，漢文原典にない補足表現を指す．それらはいずれもサンスクリット起源の固有名詞に対する語源的解釈に基づくものであって（šravast「舎衛城」，anatapintaki「給孤独長者」の語注参照），必ずしも経典の内容理解に資するものとは言えない．この自由な補足表現は，『天地八陽神呪経』をはじめとするウイグル文仏典に，しばしば見られる特徴である[21]．本経の場合も漢文仏典を底本としながらも，逐語的に翻訳することをよしとせず，補足説明的な文言がウイグル文翻訳者によって適宜付け加えられた蓋然性が高い．ウイグル文仏典にしばしば見られるこの種の嗜好性は何に由来するのか，他の類例とも比較して総合的に検討すべき課題である．

一方，モンゴル文『善悪因果経』との関係については，本稿で解決することはできなかったが，ある程度の見通しを立てることができた．ウイグル仏典から翻訳されたモンゴル仏典には，少なくとも 2 つのパターンがあることが確認される．すなわち『仏説北斗七星延命経』のように経文全体がウイグル文から翻訳される場合と，サンスクリット由来のウイグル語仏教用語を参照する場合とである．

阪大本モンゴル文『善悪因果経』の翻訳方法が後者であったとすれば，SI 1749 ウイグル文テキストが原典として参照された可能性も排除できない．この点については，その奥書からサンスクリット語に由来するウイグル語仏教用語が参照されたことが明記され，なおかつウイグル文・モンゴル文ともに現存する『金光明最勝王経』ならびに『五護呪』から抽出される仏教用語の用例とも比較することが求められよう．

---

(20) 現存する 17 世紀〜18 世紀のモンゴル文『仏説北斗七星延命経』は，ウイグル僧プラジュニャーシュリー（Skt. Prajñāśrī > Uig. Pratyaširi ~ Chin. 般若室利）によってウイグル文テキストから翻訳された可能性が高いことが指摘されている（松川 2004）．

(21) 小田 1978; 小田 2010.

参考文献目録（ABC 順）

BT VII = Kara, Georg and Zieme, Peter. 1976. *Fragmente tantrischer Werke in uigruischer Übersetzung* (Berliner Turfantexte VII). Berlin.

BT XIII = Zieme, Peter. 1985. *Buddistische Stabreimdichtungen der Uiguren* (Berliner Turfantexte XIII). Berlin.

曹凌. 2011.『中國佛教疑僞經綜録』，上海古籍出版社.

Carling, Gerd. 2008. *A Dictionary and Thesaurus of Tocharian A*, Vol. 1: *Letters a–j*. Wiesbaden.

Damdinsüren, Ts. 1979. “Two Mongolian Colophons to the *Suvarṇaprabhāsottama-Sūtra*”, in: *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 33(1), 39–58.

ED = Clauson, Sir Gerard. 1972. *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*. Oxford.

Elverskog, Johan. 1997. *Uygur Buddhist Literature* (Silk Road Studies I). Turnhout.

Gauthiot, Robert and Pelliot, Paul. 1920–1928. *Le Sûtra des causes et effets*, 2 vols. Paris.

IOM RAS = St. Petersburg Institute of Oriental Manuscripts, Russian Academy of Science.

Kara, György. 2001. “Late Mediaeval Turkic Elements in Mongolian”, in: L. Bazin and P. Zieme (eds.), *De Dunhuang à Istanbul: Hommage à James Russell Hamilton* (Silk Road Studies V), Turnhout, 73–119.

Ligeti Catalogue = Ligeti, Louis. 1943–1944. *Catalogue du Kanjur Mongol imprimé*, I: *Catalogue* (Bibliotheca Orientalis Hungarica III). Budapest.

Ligeti, Louis. 1974. *Les douze actes du bouddha* (Monumenta Linguae Mongolicae Collecta V). Budapest.

MacKenzie, David Neil. 1970. *The ‘Sūtra of the Causes and Effects of Actions’ in Sogdian*. London.

牧田諦亮. 1976.「善悪因果経について」,『疑経研究』京都大学人文科学研究所.（『牧田諦亮著作集　第一巻　疑経研究』臨川書店，2014, 379–387 に再録）.

松川節. 2004.「モンゴル語訳『佛説北斗七星延命經』に残存するウイグル的要素」，森安孝夫（編）『中央アジア出土文物論叢』朋友書店，85–92.

森安孝夫. 1986.「『善悪因果経』の流通とその史的背景」,『三島海雲記念財団事業報告書』23, 225–231.

小田壽典. 1978.「トルコ語本八陽經写本の系譜と宗教思想問題」,『東方学』55, 104–118.

小田壽典. 2010.『仏説天地八陽神呪経一巻　トルコ語訳の研究』法藏館.

Poppe, Nicholas. 1967. *The Twelve Deeds of Buddha: A Mongolian Version of the Lalitavistara*. Wiesbaden.

Radloff, Friedlich Wilhelm. 1928. *Uigurische Sprachdenkmäler*. Ed. by S. Malov. Leningrad.

任小波. 2012.「敦煌 ITJ687 號法成〈業報要説〉殘本新譯：兼論〈善悪因果經〉的藏譯者釋迦光的身份問題」，沈衛榮（編）『文本中的歷史：藏傳佛教在西域和中原的傳播』中國藏學出版社，33–35.

任小波. 2014.「藏譯〈善惡因果經〉對勘與研究導論」，沈衛榮（編）『大喜樂與大圓滿：慶祝談錫永先生八十華誕漢藏佛學研究論集』中國藏學出版社，130–143.

任小波 2016.『吐蕃時期藏譯漢傳佛典《善惡因果經》對勘與研究』，中國藏學出版社.

薩仁高娃，陳玉. 2009.「藏文〈佛説善惡因果經〉研究」,『中國藏學』2009(3), 104–108.

庄垣内正弘. 1978.「古代ウイグル語におけるインド来源借用語彙の導入経路について」,『アジア・アフリカ言語文化研究』15, 79–110.

庄垣内正弘. 1990.「モンゴル語仏典中のウイグル語仏教用語について」，崎山理・佐藤昭裕・青木正博（編）『アジアの諸言語と一般言語学』三省堂，157–174.

Shōgaito, Masahiro. 1991. “On Uighur Elements in Buddhist Mongolian Texts”, in: *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* 49, 27–49.

Shōgaito, Masahiro. 2003. “Uighur Influence on Indian Words in Mongolian Buddhist Texts”, in: K. Röhrborn (ed.), *Indien und Zentralasien* (Veröffentlichungen der Societas Uralo-Altaica Band 61), Wiesbaden, 119–143.

T. = 高楠順次郎，渡辺海旭，小野玄妙（編）. 1924–1934. 『大正新脩大蔵経』，大蔵出版.

BT XXV = Wilkens, Jens. 2007. *Das Buch von der Sündentilgung: Edition des alttürkisch-buddhistischen Kšanti Kılguluk Nom Bitig* (Berliner Turfantexte XXV), Turnhouot.

山口周子. 2013.『〈仏の物語〉の伝承と変容：草原の国と日出ずる国へ』京都大学学術出版会.

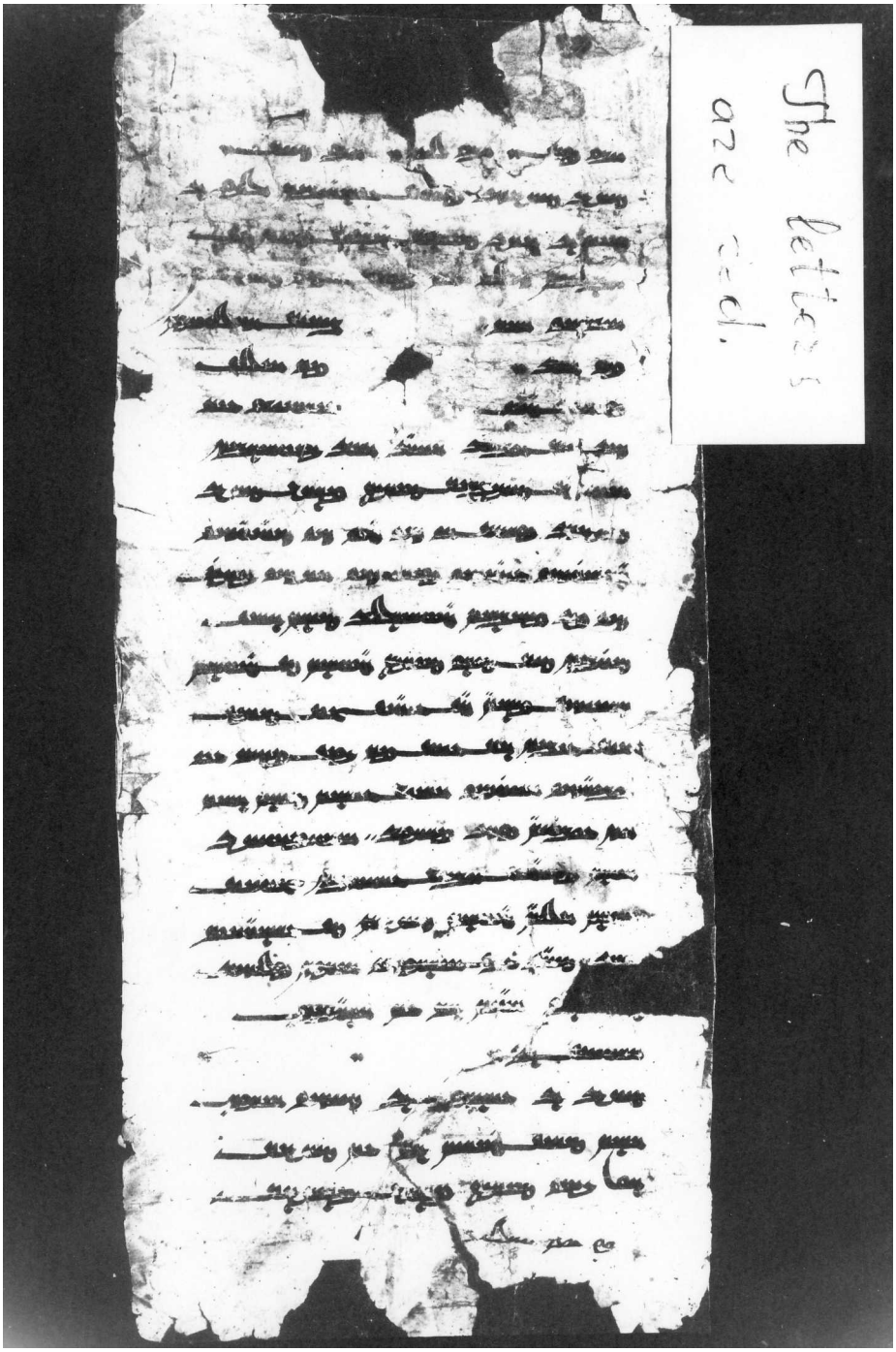
Yoshida, Yutaka. 2009. “Buddhist Literature in Sogdian”, in: R. E. Emmerick and M. Machuch (eds.), *The Literature of Pre-Islamic Iran*, London, 288–329.

張小艷. 2016.「漢文《善惡因果経》研究」『敦煌吐魯番研究』16, 59–88.

Zieme, Peter 2005. “Uigurische Fragmente aus der Pañcarakṣā”, in: S. Grivelet et al. (eds.), *The Black Master: Essays on Central Eurasia in Honor of György Kara on His 70th Birthday*, Wiesbaden, 151–164.

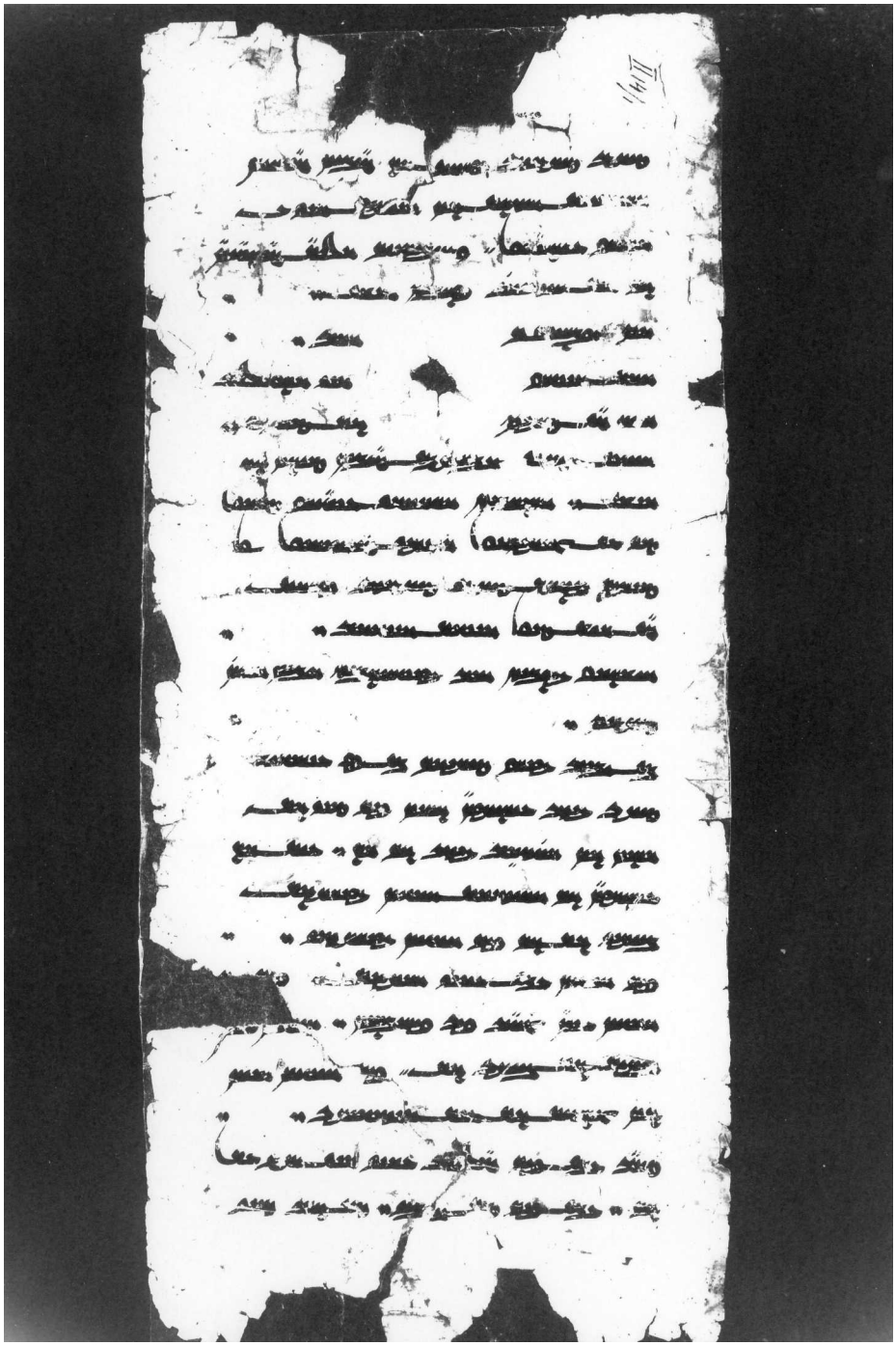
Zieme, Peter. 2009. “Auf den Spuren der altuigurischen Version des ‘Sūtra der Ursachen und Wirkungen’ (*Shan’e yinguo jing*)”, in: *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 62(4), 387–393.

付記　本稿は JSPS 科研費（JP15K02049, JP17H02401）の助成を受けたものである.



SI 1749 Recto

©IOM RAS and Tōyō Bunko



SI 1749 Verso

©IOM RAS and Tōyō Bunko